

# 農業の未来は、 楽しい記憶からはじまる。



## 農業のファンを、未来の後継者へと育む“農育”。 農事組合法人 開発営農組合 + おうみ富士農業協同組合（滋賀県・守山市）

■ まずは農業のファンを増やすことから。「泥が気持ちいい!」「苗をもっと下さーい!」初夏の田んぼに響く、賑やかな声。大人に子どもに、大学生たち、みんな夢中で苗を植えています。この「100人田植え」を企画したのは、滋賀県守山市で集落営農を行う開発営農組合とおうみ富士農業協同組合（JAおうみ富士）。「一昨年から2つの組織が組み、様々な農業体験イベントを催しています」そう語るのは、開発営農組合の北野代表。「例えば3人で3日かかる玉ねぎの収穫作業が、みんなでやると2時間ほどで終わる。収穫の一部をお土産に差し上げると喜んで帰ってくれる。こうやって労力を借りつつ土に触れる楽しさを知ってもらい、農業のファンを増やしたい。そして、一人でも多く未来の後継者を育てたい。そんな想いで続けています」

■ 目標は4段階。この地域の課題は、農家の担い手不足と高齢化。「京阪神にアクセスが良いため働き手が流れてしまう。野菜生産者は20年前から半数以上へり、今や200名ほどです」と、JAおうみ富士の木村常務。「その近さを逆に利用し、都市部からも人を呼ぼうと考えました」。こうして、農業のノウハウを持つ開発営農組合と、直売所（おうみんち）を運営し集客力に強いJAが手を結び「農育みらいプロジェクト」を開始。目標は次の4段階。①より多くの人を受け入れられる農業体験のシステムを組織横断的につくる。②地域農家のサポートのもと、本格的で楽しめる農業体験イベントを展開する。③専門家を含めた評価を繰り返し、事業を高度化。④農家となる専門コースを充実させる。引退した農家の休耕地も、人材育成の場として活用します。

■ 巡りゆく“農育”の輪。実は、3年前にモリヤマメロン栽培の実習生だった人が、今では先生として活躍しているとのこと。「作ったり流通させたり、学んだり教えたり。農業自体には“育む”力がある—そんな意味を込めて、“農育”というフレーズは地域みんなで作りました」と北野代表。今では守山市や龍谷大学とも連携し、産官学の相乗効果でますます広がってきた「農育みらいプロジェクト」の写真の中にも、未来の農業の希望となる人がいるかもしれません。



木村常務(左) 北野代表(右)



一般社団法人  
農林水産業みらい基金

未来は、いつだって、現場から生まれる。私たち農林水産業みらい基金は、JA（農業協同組合）・JF（漁業協同組合）・JForest（森林組合）グループの一員である農林中央金庫によって設立されました。

詳しくは [農林水産業みらい基金](http://www.miraikikin.org/) 検索  
<http://www.miraikikin.org/>

